

資料1 金沢素囃子関連系譜

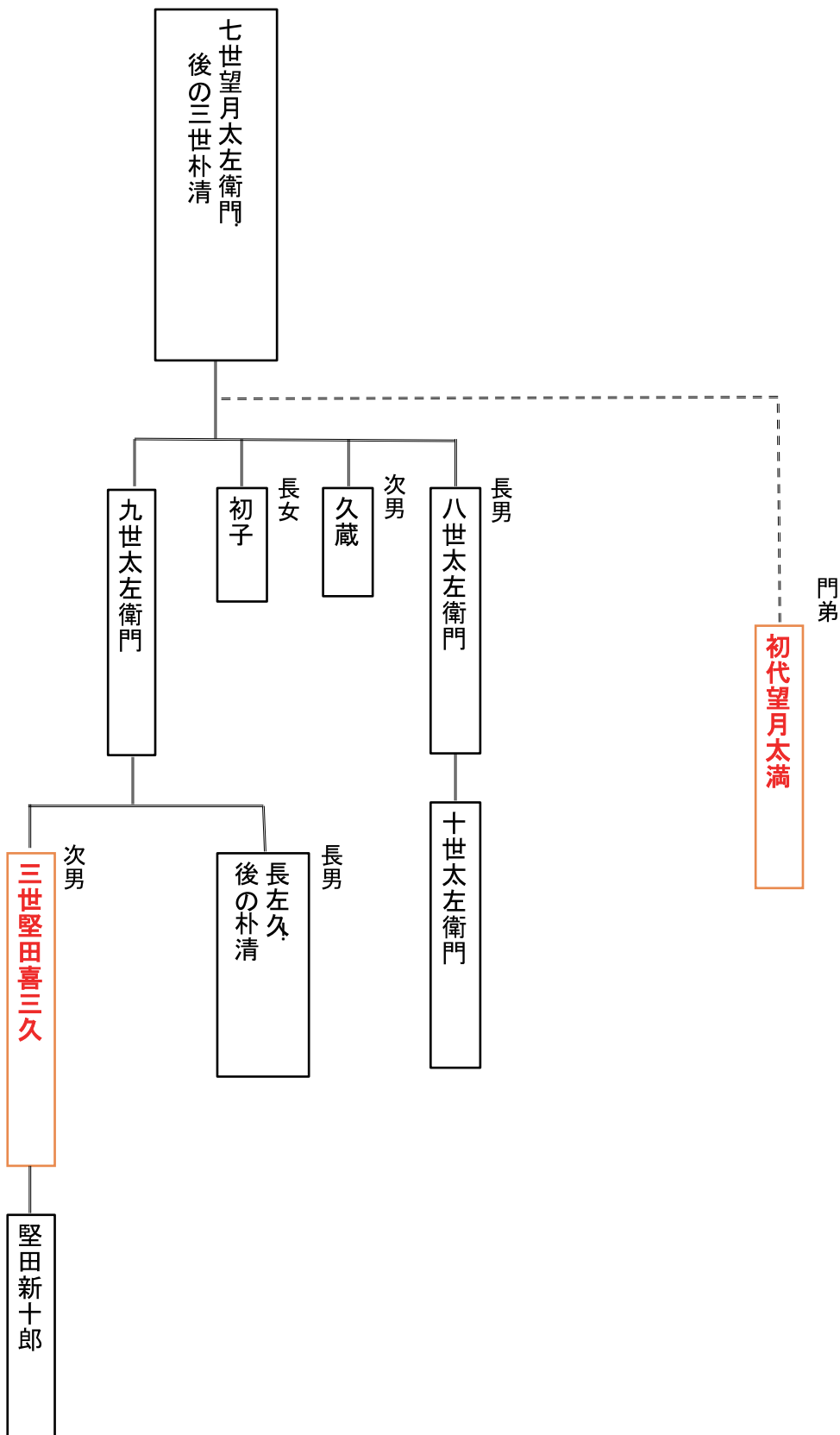
ひがし茶屋町、主計町

長唄：杵屋流

ひがし茶屋町、主計町

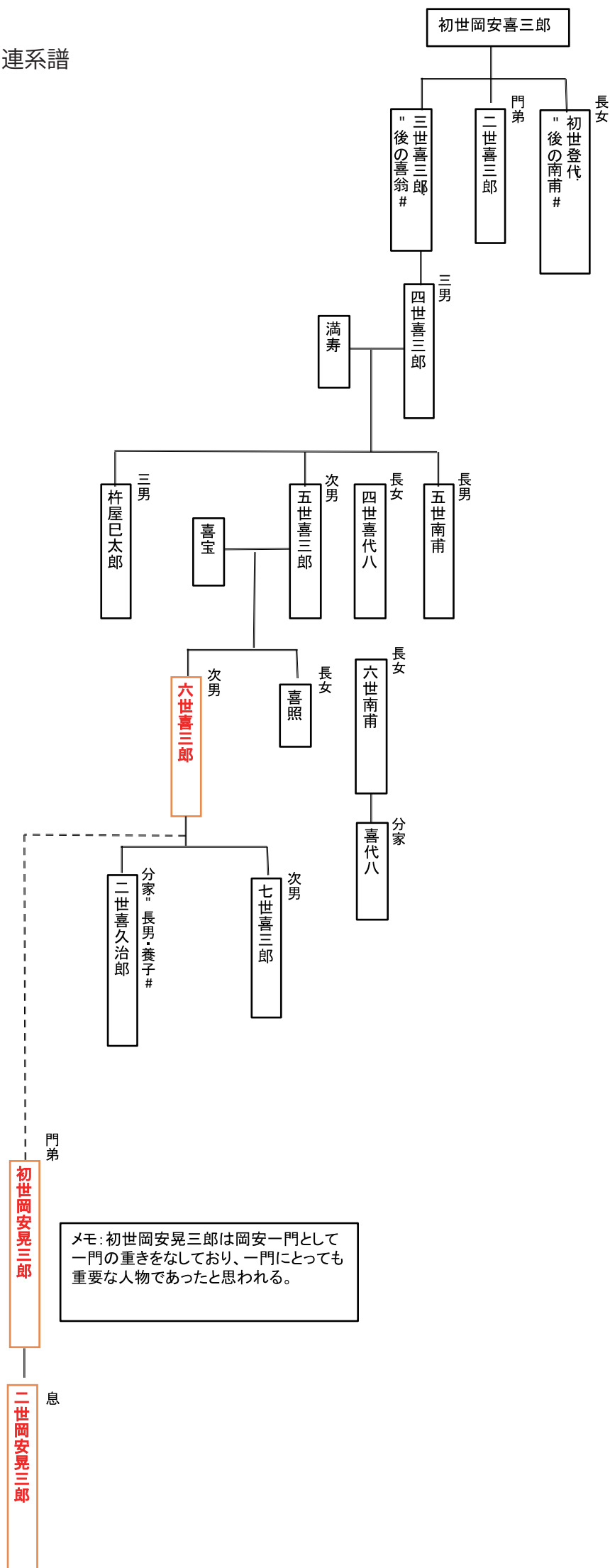
噺子・望月流

浪花町派



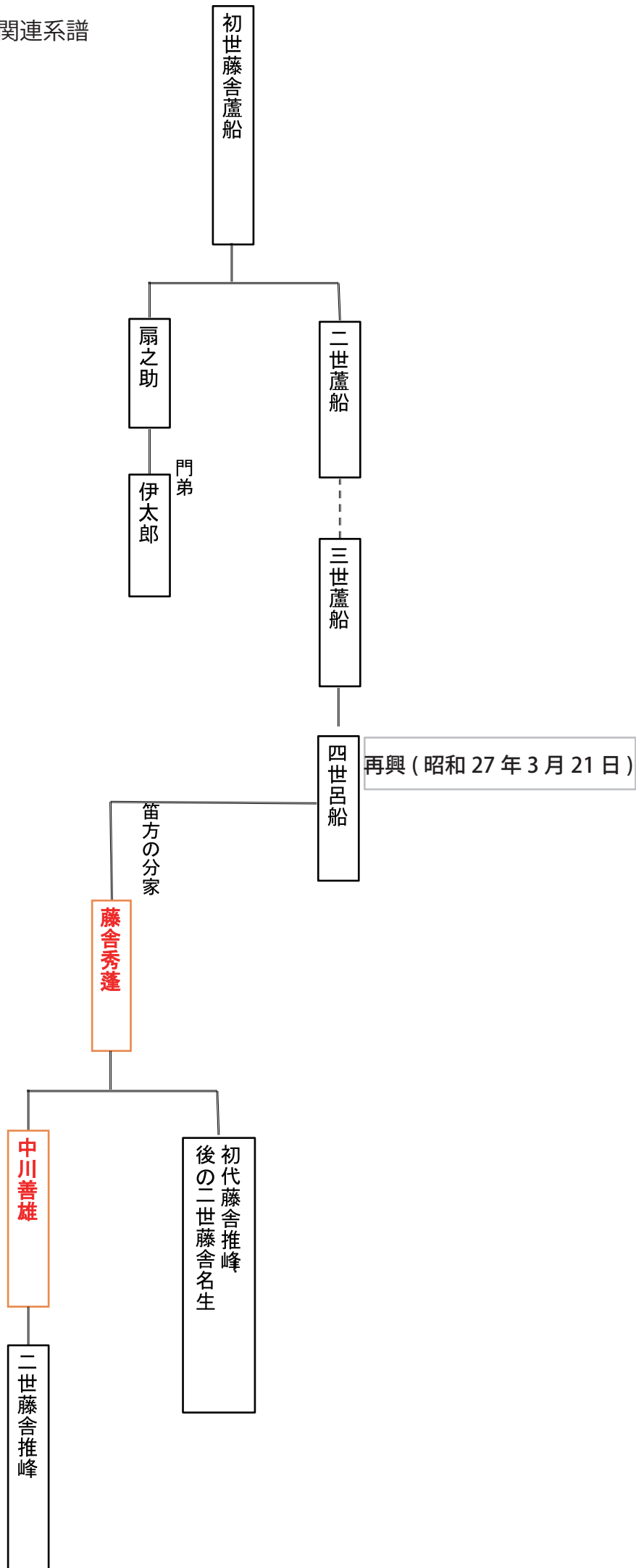
資料1 金沢素囃子関連系譜

にし茶屋町
長唄・岡安流



資料1 金沢素囃子関連系譜

三茶屋町
笛・藤舎流



「金沢おどり」平成26年9月20日(土)午後1時～ 石川県立音楽堂邦楽ホール

一、素囃子「越後獅子」三茶屋街合同

唄 小千代・京子・まゆ・江利加・えみ華

三味線 若菜・きみ代・まり千代・さと葉・仁美(替手)

小鼓 真砂美・亜希・笑弥・涼香

大鼓 桃太郎

太鼓 小梅・こと乃

笛 唐子 胡蝶

金屏風に二段の緋毛氈の雛段(演奏会スタイル)。

上段の唄・三味線(地方)は、かつらを付けず地頭。白塗りもなし。黒紋付き。

下段の囃子の芸妓は白塗りに島田の頭をつけ、黒の出の衣装。

《所感》

幕が開くと舞台の華やかさに客席が沸く。金沢芸妓が受け継いでいる「素囃子」演奏とあって、お目当ての方も多という印象。曲の抜き差しは下記の黄色い部分がカットされていたが、ほぼ全曲で、長唄の演奏形式と変わらないものであった。素囃子として演奏できるのは芸妓のみ。プロの演奏家の助演なく演奏される演奏としては、上段・お囃子共に大変完成度の高いものであり、金沢芸妓が高い意識をもって継承していることがわかる。特に立唄の小千代氏は、深みのある声の中にも華やかさがあり、曲全体を引っ張っていた。

晒の合方では、小鼓に華やかな手付が行われており、それぞれの芸妓に見せどころが作られていた。お囃子も個々の能力が高く、芸妓にありがちな線の細い演奏ではなく、一本芯の通った凜とした演奏が印象的であった。

<越後獅子>

打つや太鼓の音もすみわたり 角兵衛 角兵衛と招かれて

居ながら見する石橋の 浮世を渡る風雅もの

歌ふも舞ふもはやすのも 一人旅寝の草枕

おらが女房をほめるぢゃないが 飯も炊いたり水仕事

あさよるたびに楽しみを ひとり笑みして来りける

越路がた お國名物は様々あれど 田舎なまりに片言まじり

獅子唄になる言の葉を 雁の便りに 届けてほしや

小千谷縮の何処やらが 見え透く国の習ひにや 縁を結べば

兄やさん 兄ぢゃないもの 夫ぢゃもの

<濱唄>来るか来るかと濱へ出て 見ればの ほいの 濱の松風音や

まさるさ やっとかけの ほいまつかとな

好いた水仙 好かれた柳の ほいの 心石竹 気はや紅葉さ

やっとかけの ほいまつかとな

辛苦甚句もおけさ節

何たら愚痴だえ 牡丹は持たねど 越後の獅子は

己が姿を花と見て 庭に咲いたり咲かせたり

そこのおけさに異なこと言はれ ねまりねまらず待ち明かす

御座れ話しませうぞこん小松の蔭で 松の葉の様にこん細やかに

弾いて唄ふや 獅子の曲

向ひ小山のしちく竹 いたふし揃へてきりを細かに十七が

室の小口に昼寝して 花の盛りを 夢に見て候

【晒しの合方・初段】

見渡せば 見渡せば 西も東も花の顔 何れ賑ふ人の山 人の山

【晒しの合方・二段】

打ち寄する 打ち寄する 女波男波の絶え間なく

逆巻く水の面白や 面白や

【晒しの合方・三段】

晒す細布手にくるくると さらす細布手にくるくると

いざや帰らん 己が住家へ

二、舞扇四季花競(まいおうぎしきのはなくらべ)～大和楽でつづる～全八景

幕間がなく、緞帳を降ろさず全八景通しで見せる演出。景は春夏秋冬に区分されていた。

『第一景 花くらべ』作詞・作曲 大和久満 作調 堅田喜三久 琴手付 初代米川敏子

にし茶屋街の芸妓による桜をモチーフにした踊り。西川右近による振付。

《所感》

2丁で開くと暗転の中、上手の見切りの中から琴の音が聞こえてくる。

正面には暗転の中、立方8人(花の精)が板ついている。ブラックライトで照らされて、立方が持つ蝶に見立てた扇の蛍光ピンクと菜の花の持ち枝の黄色が浮かび上がる。ひらひらと動かす扇が暗転の中では効果的。チョンパで舞台が明るくなると、大和楽の演奏も加わり華やかな舞台となる。

大道具は正面に藤と牡丹が大きく描かれた紗幕。上部には大きな桜が描かれた紗幕が上部を覆うように吊られている。8人の花の精は揃いの衣装⇒頭は根取り下げ髪、少し色のトーンが暗い着物(青みのある紫とピンクのグラデーション)裾は引かずに市松の半幅帯を片流しに締めている。小道具は扇と菜の花の持ち枝。

8人が少し踊った後に、照明が暗くなり、天井の桜の紗幕が下り、中央から花遊女がセリ上がる。横から風を送り桜の紗幕を揺らす演出だが、風を送る装置の音がうるさいのが難点。

花遊女は、立兵庫に白の着物、橙の前帯に紺の紗の掛け。小道具は団扇。最後は華やかに花遊女と花の精の総踊りとなる。

第一景の立方が花道へ引っ込むと本舞台は暗転となる。

『第二景 春信描く』作詞 邦枝完二 作曲 宮川寿朗 作調 堅田喜三久

藤間勘十郎による振付。

《所感》

チョンパで舞台が明るくなると、正面には笠森稻荷の境内のパネル、水茶屋の長床几。主計町のベテラン2人(かず弥、たか子)による、鈴木春信とお仙を題材とした踊り。春信は着流しにはおり姿。茶屋娘お仙は島田に文庫帯の可愛らしい印象。

浮世絵師春信が水茶屋でお仙に出会う場面を踊り、お仙の艶やかな美しさが表現されているしっかりとした古典舞踊の舞台。かず弥氏は貫禄があり、線の細いたか子氏とは男女というバランスはとても良く、美しい舞台であった。

『第三景 明石の源氏』作詞 駒井義之 作曲 大和久満 作調 藤舎名生 琴手付 初代米川敏子

ひがし茶屋町による源氏物語の須磨と明石を題材とした5人立ちの踊り。若柳東穂振付。

《所感》

春信の大道具のパネルが上に飛ばされると、立烏帽子・狩衣姿の光源氏が板付している。

大道具は正面に波の紗幕、松のつり枝。

明石の上と光源氏の出会いを踊り、光源氏の回想の場面では都に残してきた三人の姫君(葵の上・朧月夜・夕顔)が本舞台の三つのセリから登場。姫君はかしき、十二単姿。

『第四景 七夕』作詞 花柳寛 作曲 大和久満 作調 堅田喜三久 琴手付 米川敏子

主計町の三人による踊り。藤間勘十郎振付。

《所感》

暗転の中、蛍の差し金を持った黒子が5～6人登場し、暗闇の中に蛍が舞う幻想的な場面で始まる。音はウインドチャイムを使用。蛍がはけると、満天の星空のもとで大きな笹に短冊を付けている娘が板付している。

町娘三人は、島田、衣装は水色・黄色・朱の裾引き、帯は角出し。夜の場面に鮮やかな色の着物が映え町娘の可愛らしさ一層引き立てている。短冊に思いを込めて情緒的に踊る場面や娘らしく華やかに踊るなど、短い曲の中にも変化を持たせている。総踊りでは、三人の踊りが揃い、腰が入っているため、早い踊りでもばたつくことが無かった。

『第五景 一調一管 飛翔』

石川県無形文化財に認定された、にし茶屋街の峯子氏、乃莉氏による笛・小鼓の素演奏。

第四景から舞台が転換されると、それぞれの台に乗った二人がセリ上がる。(大和楽の御簾は下りる)

《所感》

峯子のご高齢ということもあり笛の息は続きにくいのが、乃莉が巧みにフォローしている。有名な二人ということもあり、客席からは大きな拍手。

『武蔵野風月 太田道灌』作詞 仁村美津夫 作曲 大和久満 作調 堅田喜三久

にし茶屋街の八重治さんによる一人立ちの素踊り。西川右近振付。

紫の着物に前割れ後見。大道具は武蔵野の秋の野山。小道具は霞の扇一本。

《所感》

太田道灌の「山吹伝説(1)」を題材として、武蔵野のゆかしさを踊る。踊りがお上手な方というだけあって、華奢な方だが舞台での存在感がある。

『第六景 雪の降る街を』作詞 内村直也 作曲 大和久満 作調 堅田喜三久 琴手付 米川敏子

ひがし茶屋街の芸妓による、雪景色の金沢の街を題材とした舞台。若柳東穂振付。

《所感》

雪音で始まると、暗幕を半分降ろした状態で奥を Horizont(青)で雪を降らせ、手前には雪傘を持った芸妓が二人シルエットで浮かび上がる。パノラマ映像のような美しい画。

芸妓は、角出しの2人と短い振り下げ帯の3人の計5人立ち。

照明が明るくなると、半分下りていた暗幕もはねて、美しい雪景色の中、芸妓が傘を使って情緒的に踊る。

最後は雪を大量に降らせて迫力の内に幕となる。

『第七景 お座敷太鼓』

金沢三茶屋街のお座敷太鼓の披露。

本舞台には一列に毛氈の上に座って黒紋付き・柳の帯の芸妓さんが8人板ついている。締め太鼓と吊ってある盆太鼓で一人一セット。大和楽の唄・三味線に合わせて太鼓を打つ。

内容は、竹雀(たけす)・八丁目・四丁目・さわぎ。

《所感》

四丁目は、それぞれの茶屋街の人がペアになって技を見せる場面あり。さわぎは、金沢のことが唄の文句に唄われており、小鼓が入るなど華やか。

『第八景 金沢風雅』作詞 村松友視 作曲 大和久満 作調 堅田喜三久 振付 西川右近

チョンパで照明がつくと、前割れ後見のかず弥が挨拶し、かず弥の音頭で手締めとなり、その後立ち方 25 名による総踊りとなる。小道具は扇のみ。本舞台正面には茶屋街の地方がならび、客席脇の御簾では大和楽連中も一緒に演奏に加わる。

注

(1) 太田道灌は扇谷上杉家の家宰でした。ある日の事、道灌は鷹狩りにでかけて俄雨にあってしまい、みすぼらしい家かけこみました。道灌が「急な雨にあってしまった。蓑を貸してもらえぬか。」と声をかけると、思いもよらず年端もいかぬ少女が出てきたのです。そしてその少女が黙ってさしだしたのは、蓑ではなく山吹の花一輪でした。花の意味がわからぬ道灌は「花が欲しいのではない。」と怒り、雨の中を帰って行ったのです。その夜、道灌がこのことを語ると、近臣の一人が進み出て、「後拾遺集に醍醐天皇の皇子・中務卿兼明親王が詠まれたものに【七重八重花は咲けども山吹の(実)みのひとつだになきぞかなしき】という歌があります。その娘は蓑ひとつなき貧しさを山吹に例えたのではないのでしょうか。」といいました。驚いた道灌は己の不明を恥じ、この日を境にして歌道に精進するようになったといいます。

表1 昭和2年11月～昭和3年11月に金沢市内で行われた邦楽・日本舞踊公演一覧

年	月	会名	ジャンル	場所	主催者	備考	
昭和二年	十一月	歌澤小芝会第二回	小唄	金谷館	歌澤小芝		1
		都山流尺八演奏会	尺八	公会堂	田邊尚雄		2
		鶴来温習会	舞踊	吾妻座	西川養枝		3
		おさな会	長唄（主計町芸妓）	主計町演舞場	杵屋六以満		4
		常磐津温習会	常磐津（東廓芸妓）	東廓演舞場	常磐津壽々松		5
		長唄鳴物温習	鳴物	東廓演舞場	高沢（名不明）		6
		西廓長唄子供会	長唄（西廓ターポ）	公会堂	杵屋弥三次郎		7
		金石温習会	（不明）	寿座	北村（名不明）		8
昭和三年	一月	小柴会唄初め	小唄	金城楼	歌澤小芝		9
	三月	常磐津勉強会第一回	常磐津（北廓芸妓）	公会堂	式澤文治		10
	四月	長唄東松会第四回	長唄	東廓演舞場	北仲師匠		11
		さざ波会第三回	常磐津	新並木	常磐津壽々松	「さざ波会」は金沢唯一の素人常磐津の会	12
		主計町芸妓芝居		尾山倶楽部		振付：澤村紀若 床：竹本磯子軒、竹本春登代	13
		常磐津歡聲会第七回	常磐津（東廓芸妓）	東廓演舞場	常磐津壽々松		14
		若柳会	舞踊	尾山倶楽部	若柳吉蔵		15
		東廓若柳会	舞踊（東廓芸妓）	尾山倶楽部			16
		生田流箏曲大会	箏曲	公会堂	佐川照子		17
	招魂祭余興舞踊		兼六園		出演：七尾町有志、北廓、西廓、東廓、主計町、山中芸妓連	18	
	五月	長唄かごめ会第一回	長唄	尾山倶楽部	吉村孝郁郎		19
		老郁郎名披露目会	長唄	尾山倶楽部	吉村孝郁郎		20
		長唄花菱会第一回	長唄	望月	杵屋勝七代	素人長唄の会	21
	六月	常磐津復習会	常磐津（東廓芸妓）	東廓演舞場	常磐津壽々松		22
		舞踊雛鳥会第二回	舞踊	東廓演舞場	若柳吉忠		23
	七月	長唄浴衣会	長唄	公会堂	杵屋弥三次郎		24
	八月	長唄東紫会	長唄	尾山倶楽部	（不明）		25
		長唄芽生会第四回	長唄（東廓芸妓）	東廓演舞場	杵屋六左衛門	杵屋五三郎、五隻出演	26
		かごめ会第二回	長唄	花月	吉村孝郁郎		27
	九月	歌澤豊芝会第一回	歌澤	をし鳥			28
十月	主計町温習会	主計町演舞場		主計町	振付・藤間勘十郎、補導・藤間勘奴 長唄・杵屋六以満 常磐津 杵屋つね 鳴物・望月太満	29	
	花菱会第二回	長唄	望月	杵屋勝七代	素人長唄の会	30	
	長唄笹唄会第五回	長唄	金谷館	岡安喜千壽	素人長唄の会	31	
	さざ波会第四回	常磐津	新並木	常磐津壽々松	「さざ波会」は金沢唯一の素人常磐津の会	32	
十一月	東廓秋季温習会		尾山倶楽部	東廓		33	

※番号は便宜上使用している

六世藤間勘十郎氏
宗家杵屋寒玉翁
十四世杵屋六左衛門氏
家元望月朴清翁
九代目望月太左衛門氏

特 別 出 演

◇其他、長唄、舞踊、鳴物の師匠連參加◇

杵 屋 六 以 滿
望 月 太 滿

名 披 露 大 會

▽會期五月十四日十五日

▽會場尾山俱樂部

主 計 町 事 務 所